



IKEA神戸

■発電容量380kW ■パネル総数1080枚
■パワコン:50kW×6台 店舗屋上の駐車場に太陽光発電設備を施工



IKEA弥富物流センター

■発電容量550kW ■パネル総数2048枚 ■パワコン:500kW×1台
電気の使用量を考慮し、設置可能なスペースの約1/4に設置

テムを熟知したエネテックにとって、質の高いO&Mによってこの問題を解決していくことが喫緊の課題であると捉えているからだ。「初期不良に加えて、過酷な状況下で使用される太陽光パネルに関しては経年劣化が激しいのも事実。常に最大出力を

維持するために、メーカーとの補償対応サポートも含め、最善を尽くすことが我々の役割だと認識しています」と野口氏は語る。

『業界標準を作っていく』という強い使命感のもと、電気保安法人として全国で初めてJET PV O&Mに保守点検業者として登録。他社に先駆けてEL検査も導入し、さらにメーカーの出荷段階で不具合があることを仮定・検証し、「ソラパト」というブランド名でO&Mをいち早く事業化もしてきた。これらの積み重ねが太陽光発電検査事業のリーディングカンパニーとして地位を確立したと言える。

エネテックが手掛けてきた施工数とメンテナンスは合わせて5,000件以上。豊富な実績から得たデータは設備設計のバックアップとしても活用しているという。太陽光メンテナンスのパイオニア技術集団として「絶対に不具合は見逃さない」という強い使命感をもって質の高いメンテナンスサービスを提供している。また、同分野の先駆者としてこれまでの経験から得た情報をブログなどで共有。業界全体のスキル向上や環境の改善にも取り組んでいる。

自家消費は 再エネ主力電源化への第一歩

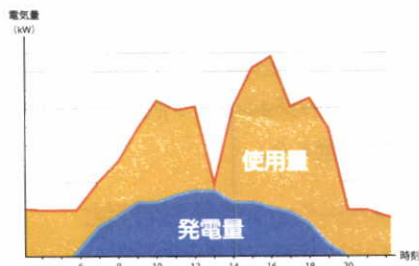
「自家消費。それはCO₂削減の切り札として有効な手段の一つであり、再エネが主力電源となるうえでの第一歩である」と再

エネ事業の構想を語る東氏は次のように続ける。「自家消費と相性が良いのが365日に近い稼働をして、電気使用量の多い工場や施設など。また、蓄電池と連携させることで時間帯によって電気使用量に差があるところでもメリットが出てきます。さらに自家消費を後押しする補助金や税制優遇を受けられる場合もあり、初期費用の回収年数の短縮も期待できます」

自家消費導入においては自社の環境に最適なシステムの設計・確実な施工、補助金などの申請サポート、安定運用のためのO&Mなどにおいて信頼できるパートナー選びが何よりも重要となる。これまで電気工事のプロフェッショナルとして数々の実績を積んできたエネテックは、その専門性や知見を活かしてコンサルティングの領域にも足を踏み入れ始めた。「自家消費時代」の到来とともに、エナジーソリューションカンパニーとしてどう進化を遂げるのか。今後の動向に注目したい。

図①

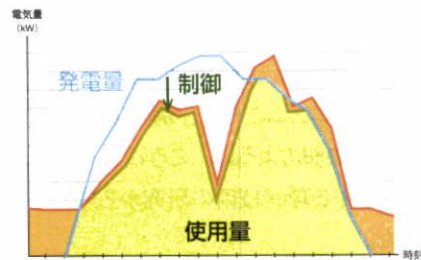
使用量を超えない発電量で設計



使用量を超えない発電量設計もそのパターンは多岐に渡る

図②

逆潮流が起こらないよう出力を制御



逆潮流を起こさない出力制御はいかにロスを減らすかが重要
他にも蓄電池を組み合わせるなど環境やニーズに最適な設計が求められる

お問い合わせ先

先進技術の、その先へ。

ENE TECH

株式会社エネテック

☎: 0120-920-137

<https://www.enetech.co.jp/>



丸ごと食べてしまえる食品パッケージOoho!

使い捨てプラ廃絶、 そして循環経済へ

海洋プラスチックが地球規模の緊急課題として語られるようになって久しい。欧州連合(EU)は世界に先駆けて、使い捨てプラを禁止する法律を成立させ、代替プラ開発、そしてさらには地球社会の循環経済を実現するための産業構造変革に向けて、世界中の政産学が一緒になってアクセルを踏んでいる。期待される新規技術やアイデアは続々と出ているが、中でも、丸ごと食べてしまえる食品パッケージOoho!(ウーホ!)とその仕組みを考案した若い企業 Skipping Rocks Labが注目されている。魔法のような包装革命に、国境を越えた財団や顧問サービスが、前引き後押し、ぐいぐい支援を惜しまない。

文:栗田路子氏

原料は持続可能な「海藻」

かわいらしい透明の小袋入り飲料。これがOoho(ウーホ!)だ。

小袋の原料は海藻。『褐藻』と総称される多細胞藻類で、世界の海洋に大量に存在する。肥料を必要とせず、1日に1メートル以上も育つため、枯渇することのない持続可能な資源と見なされる。むしろ、有効活用できれば、海洋の酸化防止に貢献できて一石二鳥だ。植物由来だから食べてしまえるし、自然界に放置しても4~6週間で生分解する、正真正銘、100%持続可能な原料だ。

この褐藻を原料にフィルムを成型するための素材を開発した。プラじゃない素材——という意味を込めて、『NotPla』と命名。この素材を用いて、用途に応じた液体を60~100ml入れた小袋を製造するコンパクトな装置を開発。素材と

装置をセットで販売するビジネスモデルとした。植物由来のバイオプラはこれまでもいろいろ開発されてきたが、長持ちしないのが難点。『消費する現場で必要なだけのウーホを作る』——これなら、保存期限の短さは問題にならない。地産地消、食品ロスゼロ…持続可能な社会のためのキーワードだ。

スポーツ飲料、ジュースやカクテル、ケチャップやドレッシングに

まず、ランニング競技の保水ポイントで実験。そのまま口に入れてもよく、投げ捨てられても、ゴミも出ないことから、選手にも、オーガナイザーにも大好評を博した。新しもの好きな若者のイベントでは、ジュースやカクテルを入れたウーホ!はそれだけで話題をさらう人気者だ。さらに、ファーストフード店のケチャップやマヨネーズの包装として、使い捨てプラの代替どころか、ゴミ削減になると注目を集めた。ホテルやスポーツ施設

に備える一回分ずつのクリームやシャンプーといったトイレタリー用途などへと、期待はどんどん広がる。今では、二重にしたり、厚みを増したりなどで耐久性を高めたバージョンアップ版Delta(デルタ)も開発した。

イノベーションを産む若者と ぐいぐい牽引する政産学

創業者のロドリゴとピエールは、ロンドン・インペリアル・カレッジとロイヤル・カレッジ・オブ・アートという最難関校でイノベーション・デザインとエンジニアリングを学んだ逸材だ。その2人がまず着目したのは、自然界が液体を閉じ込めるメカニズムだった。例えば、卵の黄身や魚の卵のように。こうして、人工いくらを作る球状技術の研究からスタートした。

まずは、インペリアル・カレッジ内に設置された、気候変動対策に取り組む



ウーホ!は、こんなランニング競技での保水ポイントでテストされ好評だった

起業を支援するインキュベータ・プログラム『Climate KIC』に参加。これは、欧州連合 (EU) の独立専門機関である欧州イノベーション&テクノロジー研究所 (EIT、本部ハンガリー・ブタペスト) が主催する。こうして彼らは、ウーホ!の試作品開発に成功した。

2014年、ロンドンで起業。食品やプラスチックなど5つの分野で、循環経済を実現させる起業を支援するアドバイザリー機関 Advance London に助けられた。以来、環境や持続可能な発展、循環経済に通じる起業に与えられる賞を次々と受賞。

こうして、2017年4月クラウドファンディング『CrowdCube』を介して投資を仰ぎ、12月にはEUの中小企業支援基

金EASMEから助成金を獲得して、合計110万ドル(約1億2,000万円)の資金調達に成功。ウーホ!を製造するコンパクトな装置を開発。同年5月には、循環経済への産業構造変革を推進するエレン・マッカーサー財団 (Ellen MacArthur Foundation) から、新進インベーター5社の一つとして迎え入れられた。マッカーサー財団が選ぶ100社には、世界有数の研究機関や大学、先端企業、国や市町村などの行政機関など様々なステークホルダーが参画しており、今日、世界経済を循環経済へ転換させるための中枢機関となっている。

2018年夏、Sky Ocean Venture から追加投資を受け、チームを拡充。最近、循環経済への移行をさらに加速するために、マッカーサー財団やシュミッツ財

団 (Schmidt Family Foundation、元Google執行会長のシュミッツ氏とその家族が主催) などが出資する3か年計画「New Plastic Economy」で、Circular Design Challenge賞を受賞。いよいよ、ビジネスとしての船出が順風漫歩で始まったところだ。

Skipping Rocks Labを、どういう企業と言えよいのだろう。創業者のロドリゴはスペイン人、ピエールはフランス人、その彼らがBREXIT真っ只中の英国で奮闘し、世界中の財団やインキュベータが全力で支援する。理工系と、アート系と、コミュニケーション系が混ざりあう若い多様なチームが、地球の未来への存続をかけて、脱プラを、循環経済への転換を実現してほしいと心から願ってやまない。